

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者：周 允元	
論文担当者	主 査 吉村 紳一
	副 査 垣淵 正男
	副 査 若林 一郎
学位論文名	Scleral buckling versus vitrectomy for young japanese patients with rhegmatogenous retinal detachment in the era of microincision surgery: real-world evidence from a multicentre study in Japan (極小切開手術時代における日本人若年者の裂孔原性網膜剥離に対する強膜内陥術と硝子体切除術の手術成績と合併症の比較：多施設後向き観察研究)
論文審査の結果の要旨	
目的：裂孔原性網膜剥離（rhegmatogenous retinal detachment；RRD）は網膜の一部に裂孔が生じた結果、液化硝子体が網膜下に流入し網膜が剥れる疾患で、原則早期に治療が行われないと失明に至る。RRD の治療には強膜内陥術（scleral buckling；SB）, 硝子体切除術（pars plana vitrectomy；PPV）が主に用いられ、本邦では 50 歳以上の RRD 症例において、白内障手術を併施する極小切開 PPV が治療の第一選択である。50 歳未満の症例では水晶体温存の観点から白内障手術を併施しない SB が第一選択であったが、昨今の硝子体手術の技術革新により PPV に取って替わられようとしている。 これまで RRD 診療における SB と PPV の手術成績は相違ないと報告されていたが、若年者に限定した両術式の比較検討は行われていない。そこで、これらの最近のトレンドを踏まえ、多施設・多症例での若年者 RRD に対する後ろ向き検討を行い、極小切開手術時代における、real world evidence を基にした最新の RRD 治療の実態を解明した。 対象：2013 年 4 月から 2016 年 8 月までに日本臨床網膜研究会（JCREST）参加施設内で治療をうけ、初回手術から 6 ヶ月以上経過観察が可能であった 50 歳未満の若年者 RRD 患者 562 名（男性 384 名、女性 178 名、33.0±11.8 歳；594 眼）である。初回網膜復位率（初回での手術成功率）を主要評価項目とし、患者背景、臨床結果を SB 群と PPV 群で比較検討した。また、各術式における合併症についても比較検討を行った。 結果：選択術式は、SB 群 295 眼（49.7%）、PPV 群 262 眼（44.1%）、併用群 37 眼（6.2%）であった。初回復位率は SB 群で 92.2%、PPV 群で 93.9%と有意差なく、手術手技としての優劣はなかった。しかし、合併症という観点では、PPV 群で術後 1 年以内の白内障形成（6.5% p=0.0005）や増殖性硝子体網膜症の発生（2.3% P=0.0047）が有意に高い結果となった。 結論：若年者網膜剥離の術式選択において SB と PPV は同じ頻度で行われていた。初回復位率に優劣はなかったものの、術後白内障形成や増殖硝子体網膜症の発生などの術後合併症の観点からは、小切開硝子体手術が全盛の現代においても、強膜内陥術を症例によっては選択する必要があると再認識する結果であった。 申請者は本研究を通して、本邦での極小切開手術時代における 50 歳未満の若年者裂孔原生網膜剥離に対する治療の傾向を明らかにした点で学位授与に値するものと判断した。	